



Title	巻頭言
Author(s)	須田, 勝彦
Citation	教授学の探究, 26
Issue Date	2009-02-16
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/35597
Type	bulletin (article)
File Information	suda.pdf



[Instructions for use](#)

巻 頭 言

須 田 勝 彦

この雑誌が刊行されて以来、四半世紀が過ぎた。具体的な教科の、具体的な教育内容に関する教授プランの作成、教育実践開拓への提案、それらに関する検証を進めながら、未定形な教授学への構想を次第に明確にして行こうと考えた。特に、新しい教育実践を育てる苗床となることを中心課題と考えた。その成果は決して貧弱なものではない。

教育内容構成を軸とした教授学研究に関心を持つ多くの研究者の参加があった。優れた教師による、優れた実践の展開があった。大学院生の新しいセンスによる授業プランを育てた。研究というものに触れて間もない学部学生も、研究を通して自らを表現する経験を楽しんでくれた。それらはすべて、近未来における教授学建設の礎になるに違いない。だから、未定形な教授学の構想について述べることはつぎの世代を担う若い人たちに委ねたいと思う。ここでは関連する二つの課題について述べる。

この第26号を含めて、この雑誌に掲載される論文は共通の、隠れたキー・ワードを持っているのではないか。どの論文も、数学とは何か、歴史とは何か、現代をどう見るか、自然をどう見るか、といった問いかけを含んでいる。それに対する明確な答えは、それらに対応する学問の内部から聞くことは本来的にできない。しかし、カリキュラム構成にしても教育内容構成にしても、授業過程構成にしても、私たちの教授学研究は必ず、その問いに具体的に答えねばならないのである。その問いかけを学問に関する哲学と呼ぶことにしよう。哲学などは時代遅れで、今は個別の学問が存在するだけだ、という立場は、少なくとも教育内容構成の理論構築を不可能にするだろう。

教育内容構成の理論構築が貧困であれば、それは直ちに学習者の知的満足感が満たされないという現実を生み出す。現在のほとんどすべての学習者は学問に関する哲学を楽しむ機会をもたない。若い学習者が無意識のうちに求めている学問への希望、学問に関する哲学に教育が応えていないからである。

この雑誌が発行され始めたころは、満足しうるものだったか否かは別として、教育学の研究者はまだ哲学を求めていたのではないか？しかし教育学研究をこころざす若い人たちをめぐる状況は厳しい。手っ取り早く業績をつみあげることが求められる。こんな状況だからこそ、新しい哲学の構築が求められるのだ。